

お正月と豚ツ子

正月二日は初売りでたいして売れないが、形式的に景品を出す。元旦には明日の初売り景品の準備しなければならぬ。商売がどうにか軌道に乗る頃まで、日曜も休日もなく店を開き働いた。

テレビが普及し始めた頃はテレビの故障が多い。真空管式で、殆ど白黒の十四型で、一インチ一万円が相場だ。十四型だと十四〜五万円はする。一台売っても三千円位しか利益がない。安売りしなければ売れないからだ。それで修理のほうに力を入れた。

元旦に明日の初売りの準備を終え夕方裏の弟と、平沢の生家に御年始に行った。一月は日が短い。ご馳走になつて帰途に就いた頃は、外は真っ暗だった。

平沢と村田の郡境を割山と云つて峠になつている、道も狭い、平沢で四輪車を持っている人は居なかつたと思うが、車の通行は殆ど無い。

割山峠の砂利道を村田に向かつて下り始めたら、子豚が居る。クラクシヨンを鳴らしても、道の真ん中をノコノコ歩き、ビクともしない。捕まえて車に乗せ、村田の交番所に届けに行った。元旦に豚の拾得物なんて縁起でもないと思つたのか、お巡りさんは、「仙台の交番所に届けろ」と言う。それならいいと、豚を乗せ仙台に向かった。



近くの宮城野交番に、少々カラカイ気分の子豚を抱いて入った。豚はブーブー鳴くと思つていたが、抱くとキーキーと大きい声を出す。交番所の中に放したから、さあ大変、お巡りさんは、元旦から「何だこれは」と怒り顔だ。

村田交番に届けたが、これこれしかじかだと説明した。「そんな筈はない、村田交番で受け付けなければ為らない筈だ」と言う。連れて行って何処か農家にあげたらどうか、と言う。交番所の中を駆けずり回っていた子豚を捕まえ、自宅に帰った。

次の朝二枚橋の農家、庄司さんに話を話し、飼育を頼んだ。初売りも無事終わり、通常の仕事、生活が始まった。困った事に車の内部が豚の匂いが消えず、参った。完全に匂いが消えたのは、一ヶ月後位だったと思う。

豚の事はすっかり忘れていた。年末になり、庄司さんから、豚は成豚になり、出荷しなければならぬと云って来た。私もどうして良いか分らず、宮城野交番所に行って話した。

そんな記録は無いと云う。村田にも無い。当たり前だ。宮城野交番も、村田交番も拾得物証明書を出さなかったからだ。私は元旦の何時頃村田交番、何時には宮城野交番と憶えやすい日だから、はつきり申し立てた。

元旦の勤務表により、宮城野と、村田に、その時間勤務していたお巡りさんが分り、思い出して呉れたが、拾得物証明書を出さなかったのは、お巡りさんの失態である。

遅まきながら、証明書を出してくれた。そして豚を処分してもよい、との許しを得て、その旨庄司さんに伝えた。その後幾日か立つてから、庄司さんが五千円持って来た、子豚の値段、相場だそうだ。

こんな事があった年も年末は忙しい。大晦日はテレビの修理が多い、年越しのお膳に付くのは大抵十時過ぎだ、紅白歌合戦が終ってしまった時もあった。

テレビがトランジスタ化され、値段も十四インチのカラーテレビで、一万円以下、いま台所で見ているテレビは五、六年前三千円でお釣りがあった、一度も故障しない。あの時代より随分安くなったものだ。短編随筆を書いていて、真空管式テレビと、子豚のエピソードを思い出した。